



発掘 文学の宝



町では、令和6年度から「熊本県夢チャレンジ事業」を活用し、苓北町に残る文学の宝を発掘しています。今回は、苓北町にゆかりのある文豪たちを紹介する連載企画第6回目として、「五足の靴」一行のメンバーの1人で歌人、詩人の「平野万里」についてご紹介します。

企画／文 ドットワークス 下川嘉奈

ひらの ばんり ひさやす
平野万里(本名：久保)

1885年5月25日 - 1947年2月10日
埼玉県北足立郡大門町生まれ

歌人、詩人。「五足の靴」一行の1人であり、明治時代を代表する文芸誌『明星』『スバル』主要メンバー。



文芸誌「明星」や「スバル」の発行に尽力した歌人

歳端 夕

平野万里(本名：久保)は一八八五年(明治一八年)旧勢州桑名藩の士族として埼玉県北足立郡大門町(現さいたま市緑区)に生まれた。父は小学校の校長だったが、万里が五歳になる年に職を辞し、平野家は東京の本郷区森川町(現文京区)に転居して文具や煙草の商いを始めた。場所は東京大学正門の向かいだった

という。

少年の万里がこの地で初めに縁を持った文学者は、『舞姫』などで今も広く知られる小説家・森鷗外だった。

当時平野家は、離婚に伴い乳母を探していた鷗外の長男・於菟を里子として数年預かることになり、その縁あって万里少年は自宅から程近い森家を度々訪れるようになった。

森家では「おばあさん」、つまり鷗外の母にかわいがられた。森家で見聞きした出来事から鷗外を「几帳面で、物事をおろそかにしない人」だと

万里少年は心に刻んでいる。長じて作歌するようになってからは鷗外主催の歌会へも出席していた。生活の面でも、鷗外の紹介で転職をしたこともあった。鷗外死去の際には鷗外の弟らと『鷗外全集』の

編集にあたるなど、万里と森家の関わりは長く、また深かったようである。

平野万里の生涯について述べる際に重要な文人がもう一人いる。与謝野鉄幹だ。

万里が初めて鉄幹を知ったのは中学にいた頃、鷗外から薦められた一冊の詩歌集が

きっかけだった。

『先生(鷗外)は少年の私に『東西南北』という小さい本を「こんなものを読んで御覧」とか何とか言われて下すつたことがある。私はそれを読んで与謝野先生という人の存在を知り、その人が先生の許へも出入する人の一人であることを知った。』

これによって万里は鉄幹を知ったが、より影響を受けたのは後年創刊された新詩社の機関誌「明星」の方だったようである。

中学卒業後、十六歳の万里は新詩社へ加入し、歌について鉄幹の教えを親しく受けたという。歌作に自信がつき始めた二十歳の頃には従軍中の鷗外と詩歌を交えた書簡のやりとりをし、鷗外の作品を「明星」に掲載する仲立ちをした。

一九〇七年(明治四〇年)、万里の『わかき日』が刊行。年齢の同じ北原白秋などよりも早い歌集出版だった。

また、同年八月に紀行文『五足の靴』のメンバーとして富岡港より上陸し、富岡に一泊している。『五足の靴』の中で、平野万里は「B生」として登

場する。当時は数え年の二十三歳。東京帝国大学工科大学二年の終わり頃であった。

新詩社が陰りを見せ始め、白秋ら多くの歌人が去って行った後も、万里は頑として鉄幹の元に留まり、最後まで支援し続けた。大学卒業後の万里は役人や企業人として忙しい日々を送ったが、与謝野

夫妻の、とりわけ鉄幹と万里の師弟関係は希有なほどに強かった。それは師のためにと一途な行動を起こす万里の人柄もあったのだろう。

夫



『平野万里評論集』

文学の予知識がなくても読みかかれる一冊としておすすめ。回顧録もあり、随所に著名な文学者の名前が登場するのも読みどころ。

